

# 亀の背中を見つめて

福岡県 博多女子中学校一年 渡邊 咲空

「そんなぐらいい大丈夫よ。」

養護教諭として働く母は、私が怪我をした時、いつも決まって素っ気ない。もっと心配してくれてもいいのではないか。学校でもこのような対応で大丈夫なのかと心配になる。

「学校でも家でも、ちゃんと見た上で判断しとるとよ。」

と母は言う。本当だろうか。かなり疑わしい。家ではいつもチラッとしか見ていない。

母が小学校で働き始めて二十年強。それ以前は救急病院で看護師をしていた。夕食後は、

「ちょっと休憩。」

と言いつつ、床にごろんと寝転がる。無防備なその姿は、まるで甲羅干しをする亀だ。

家族でオーケストラのコンサートに出かけた時の事。開演時刻を過ぎても始まる様子はなく、客席の照明も明るいままだ。観客達が何事かとざわつき始

めた時、母が、

「ちょっと行ってくる。」

とだけ言い突然走り出した。お洒落をして踵の高いハイヒールを履いた母が、見た事もない速さで階段を駆け上がった。と、ほぼ同時に、AEDを手に入る。走る観客の姿が見えた。ふわあっと鳥肌が立った。今ここに、命の危機に直面している人がいる。誰かの命が消えるかも知れない恐怖と、そこに飛び込んで行った母が心配で、私は震え、固まってしまった。私から母の姿は見えないが、母が中心にいるであろう人混みをじっと見つめ続ける。しばらくして、母がひよこっと出て来た。先程とは比べ物にならないゆっくりとした歩調で私達の所へ戻ってきた。

「意識はあるけん、大丈夫。」

そう言って席に着き、何事もなかったかのように弟に笑顔で話しかける。私の心臓は落ち着く気配もなくバクバク暴れ続けている。ようやく引き始めた

人波の奥に、一人の高齢女性が娘とおぼしき人と退出する姿が見えた。「よかった。大丈夫そう。しっかり歩いてる」。私の鼓動も落ち着きを取り戻し始めた。

母があれ程速く一目散に走る姿を見たのは、後にも先にもこの時だけだ。私には先天性の心臓病があり、自宅にもAEDがある。会場でAEDを目にし恐怖を感じた私に対し、母は命を救う使命感に駆られて走った。強固な意志が垣間見えた瞬間だった。母はよく、

「母ちゃんはいっぱい勉強しとるもん。」

と言う。努力を重ね身につけた知識と経験が、瞬時に最善の判断を求められる母の日常をしっかりと支えている事を、母の迅速な動きから強く感じた。母の「大丈夫」を今なら信じられる。子ども達の命を預かる覚悟と仕事への誇りが伝わり、尊敬の気持ちに変わった。

亀の甲羅干しは健康維持のためと聞く。母はきつと今夜も明日も甲羅干しをする。学校の子ども達、そして私の命を守り続けてくれている母が、どうかこの一時だけでも穏やかに過ごせる事を私は願う。

